

10月8日、気持ちのよい秋の風が吹く中、名鉄ハイキングが笠松町内をコースに実施されました。ハイキングに参加した町内外の皆さんに、「道德のまち笠松」の願いや活動を知っていただこうと、岐工記念館の前にふれあいブースを設けました。

ブースでは飲み物を用意したり、岐工記念館のパンフレットを配ったり、道德のまちの缶バッジを差し上げたりしました。午前中にブースには、1,000人を超える人が立ち寄ってくださり、飲み物や缶バッジなどがなくなってしまうほどの大盛況でした。

「岐工記念館は天皇が泊まるので、わざわざ作った建物ですか?」とか「天皇は昭和何年に泊まったの?」「建物は天井がとても素敵だったけれど、いつリフォームされたのですか?」などと、熱心に質問をされる方もあり、笠松の名所への関心の高さを感じました。道德のまちにも「どんなことをやっているの?」とか「オレンジTシャツを着たメンバーはどんな人たちで

すか?」など質問があり、ボランティアの中学生と大人との共同活動を、多くの方に知っていただくことができました。笠松町は心温かく、歴史と活力ある町であることを、町内外の方々に感じとっていただけた1日でした。



中学生ボランティアによるパンフレット配り

かきまつ民話「昔むかし」

畑つなぎ ①

三日の雨で大水に

「さつまの殿さまが、木曾川と長良川の下に堤防をつくってくださるそうじゃ。これで大水が出るのも少なくなるって。」
こんなうわさが笠松近くの村々で広がったのは、二百年前のことであつた。

その年の春は、雨が多く、三日も降り続いていった。さかい川のにがり水は、日ごとに増え続けていた。

「なあに、これくらいの雨じゃあだいじょうぶ。屋敷まで水がくることはありやせん。おまけに、さつまの殿さまが川の水を流れやすいように直してくださったんじゃ。心配せんでもいい。」
「ものしりの兵藏さが、心配

せんでもいいといいなさるこつちや安心してはよ帰ろ。」
どろ水が流れていく境川に集まっていた人々も、兵藏のことばを信じて、水見まわりも残さないで寝てしまった。

夜も二時をすぎたころ、「水だ。水だ。」という声とはげしい半鐘がなりひびいた。兵藏がねまきのまま飛び出すと、強い雨をはねかえしながら、黒い水が押し寄せていた。苗代のために掘りおこした田は、どす黒い水が波うつていた。

あちらこちらから、みのかさを付けた人影が川岸を動きまわった。
(つづく)

※かきまつ民話「昔むかし」は昭和54年に発行されました。中央公民館 松枝公民館 総合会館でご覧いただけます。